



TITLE:

奇形歯の形態病理学的研究 -とくに  
類猿徴(猴徴)Pithecoïd Symbol;  
Pithekoïdes Merkmalと考えられて  
いる小臼歯多歯根症について-(  
Abstract\_要旨)

AUTHOR(S):

山下, 宰

---

CITATION:

山下, 宰. 奇形歯の形態病理学的研究 -とくに類猿徴(猴徴)Pithecoïd Symbol; Pithekoïdes Merkmalと考えられている小臼歯多歯根症について-. 京都大学, 1963, 医学博士

ISSUE DATE:

1963-06-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/211072>

RIGHT:

氏 名	山 下 宰 やま した さい
学 位 の 種 類	医 学 博 士
学 位 記 番 号	論 医 博 第 78 号
学 位 授 与 の 日 付	昭 和 38 年 6 月 25 日
学 位 授 与 の 要 件	学 位 規 則 第 5 条 第 2 項 該 当
学 位 論 文 題 目	奇形歯の形態病理学的研究 —とくに類猿徴(猿徴) Pithecoïd Symbol; Pithecoïdes Merkmal と考えられている小臼歯多歯根症について—
論文調査委員	(主 査) 教 授 鈴 江 懐 教 授 美 濃 口 玄 教 授 岡 本 耕 造

### 論 文 内 容 の 要 旨

奇形歯の形態を検討することは、一面、歯に潜在する形態の変異の傾向を探知することができ、それがすなわち、正常歯の形態を究明する資料となるのである。

著者は長年にわたり多数蒐集された大阪歯科大学口腔病理学教室所蔵の小臼歯多歯根症を肉眼的、レントゲンのおよび歯髓腔内墨汁浸潤歯牙透明法によって形態病理学的研究の結果、それらの変異に法則性があることを認容するに至ったから、ここにその成果を項目別に記す。

1. 小臼歯多歯根症の計測値は、上顎小臼歯では、全長、冠長、根長は標準値よりも小、下顎小臼歯もまた、長さは短かいものが多く、冠厚は近遠心分岐型では優、頬舌分岐型では劣であった。
2. 上下顎とも第1小臼歯は第2小臼歯よりも多根歯の発現頻度が高くその分岐様式は両歯共通で、上顎小臼歯多歯根症は、頬舌分岐と頬側根の近遠心分岐をかねて、あたかも上顎大臼歯の形態に近似している。
3. 下顎小臼歯多歯根症の分岐は、頬舌分岐(2.5)、近遠心分岐(1.0) 付加根状のもの(0.2)の比で発現し、他に頬側根の近遠心分岐、MR形成、遠心根の頬舌分岐などとの組み合わせのものがある。
4. 小臼歯多歯根症の成立には根側の發育溝が根の分岐に密接に関連がある。とくに上顎小臼歯では頬側根の頬面溝と裂溝状の口蓋溝が、近遠心分岐を招き、下顎小臼歯では近心面の舌側寄りの裂溝が、頬面溝、遠心溝MR溝ないし舌面溝と関連して多種の分岐を現わす。
5. 分岐各根の發育程度順は、上顎で口蓋根>頬側近心根>頬側遠心根、下顎では頬側根>舌側根>MR根(唇舌型)、遠心根>近心根(近遠心型)、主根>付加根(付加根型)である。
6. 各根の走向は上顎ではほぼ上顎大臼歯と同じであり、下顎では概して真直、根尖の方向は遠心へ向くものが多かった。
7. 歯根の表面性状は良好なものが多く、若干の過セメント症を認めたに過ぎない。
8. 冠各部の発達上顎小臼歯例ではおおむね良く、冠と根との調和もよい、介在結節は3根性のものに多く現われ、下顎例では2咬頭型が多く、頬舌分岐には歯冠の犬歯化、近遠心分岐は下顎大臼歯化の傾

向がある。

9. 歯冠の表面は一般に滑沢で、減形成の所見はない。

10. この種の歯もまたレントゲン像では形態の究明は不十分で、その点に関しては、墨汁浸潤法によるものは根管変異の実態を把握するに絶好で、その結果は次のとおりである。上顎では頬側根、下顎でも頬側根（頬舌分岐型）、遠心根（近遠心分岐型）および主根（付加根型）に分岐変異が現われやすい。これらの研究成果が直接、根管治療に対して、その基礎知識を提供したことと信じている。

### 論文審査の結果の要旨

人類の歯牙はその機能ことに食物の咬裂、咬断、臼磨などの顎運動に適応する歯冠と歯根の形態をそなえ、かなりの個人差はあるが、一応各歯種別の定態を承認されている。しかしその形態が統計上の有意差をはるかに逸脱したものは奇形歯と名づけ、形態病理学的な課題として取り扱われている。そして人類の歯牙奇形のうち、歯根数が異常に多いものを多歯根症といい、永久歯の各歯種に認められている。

このうち、いわゆる類猿徴（猴徴）と考えられている小臼歯多歯根症について、著者は105例を蒐集し系統的研究をとげたのである。すなわち、これら多数の上下顎小臼歯多歯根症につき詳細な肉眼的観察ならびにレントゲン検査、さらには歯髓腔内墨汁浸潤歯牙透明法による検討を試み、いろいろな角度から比較考究したのである。

もともと多歯根性の成因に関しては分化説、融合説、二元列説などがあり、また他方では歯胚の分裂ないし發育異常などが考えられ、さらに歯胚を包容する顎骨の力学的因子を重要視するなどの諸説があり、いまだ定説がないのである。ところが著者は、今回の多数症例についての系統的な形態病理学的研究の結果、それらの変異に法則性があることを認め、ことに根管変異の実態については直接臨床的にも裨益すべき基礎知見を得ているのである。

以上、著者の本研究は学術上有益であり、したがって本論文は医学博士の学位論文として価値あるものと認める。